

高校における病弱教育を対象とした障がい理解教育の一実践

兒玉尚子

(大阪教育大学大学院教育学研究科)

KEY WORDS: 障がい理解教育 病弱教育 高等学校

I. 目的

障がいのない子どもが、障がいのある子どもの理解をするための障がい理解教育の対象となる障がい種は、知的障がいや肢体不自由等が扱われやすく、病弱教育に関する報告は少ない。また、病弱教育を取り扱った障がい理解教育は、義務教育段階のものが散見されるが、高等学校生を対象としたものは見当たらない。授業内容も病種の限定や、医療面を中心にしたものが多く、病気の子どもの現状や心理面を扱った内容の報告は、ほとんど認められない。

本研究では、高等学校の生徒を対象に、「病気の子どもを対象とした障がい理解に関する授業」を行い、病気の友だちへの理解の現状や、病弱教育の課題を明らかにし、今後の授業内容の検討を行うことを目的とした。

II. 方法

1. 期間・対象者：2016年12月に「病気の子どもを対象とした障がい理解に関する授業」を2クラス各1回実施。A 高等学校普通科3年生33名、看護科3年生32名、計65名を対象とした。

2. 授業内容：授業の展開は次の通りである。①対象者が入院治療や継続的な治療が必要な病気を想起する時間を設け、その後、説明。②病気の子どもの日常生活や学校生活の状況の説明。③身体的な困難さの具体例を示す等の後、病気の子どもの困難さの説明。④心理面に関して、病気の子どもの不安を想像することをねらったワークを行い、その不安に対して友だちとして、どのように向き合い、関わるのかを考える時間の設定。⑤病気の友だちと関わる可能性についての説明。

3. 調査内容：質問項目は、独自に作成したものをを用い感想や意見等を自由記述によって回答を求めた。「質問①病気の友だちと関わる時に、どのようなことに注意しなければならないと思うか」、「質問②授業を受けた感想」

4. 分析方法：回収された自由記述の回答の内容を、類似した項目に選出して分類しカテゴリー生成を行った。分析過程においては、特別支援教育の研究に従事する大学院生4名、病弱教育専門家1名の計5名が分析に参加し、カテゴリーの妥当性の検討を行った。

5. 倫理的配慮：文書と口頭で個人情報保護等の倫理的配慮に関する説明を行い、同意の得られた者のみ質問紙への回答を求めた。

III. 結果

結果を質問①はTable1に、質問②はTable2に示した。

IV. 考察

(1)質問①：結果から、「無理に何の病気か聞かない」、「からかわない」、「相手に寄り寄りそう」などの言及が認められ、病気の友だちの心理面への理解の必要性を感じたことが推測される。身体面の配慮に関する言及も認められたが、少数であり、病気の友だちと接する際には、心理面の困難さを理解し関わる必要があると感じたことが示唆された。

(2)質問②：「自分が同じ状況であったら」と想像したり、自身が病気になった時の経験を思い出しながらの回答が認められた。そのような気持ちで授業を受けることで、病気による困難さや不安感を想像することができたと考えられる。

そのため、病気を自らとは関係ないものと捉えるのではなく身近なものとして考えるきっかけになったと推測される。「退院したらあたたかい言葉をおくりたい」、「早く学校生活に慣れてほしい」といった回答もあり、病気の友だちの復学後の不安にも目を向ける機会になったと推測される。

病気の子どもの日常生活や闘病生活について知り、病気になった時の気持ちを想像する授業を通して、生徒自らの立場との変換を行いながら、相手の立場に立ち、病気の友だちについて想像することができたと考えられる。

看護科においても、普通科と同様に病弱教育の存在や意義について知ったり、病気の友だちや病気の人の気持ちについては初めて考えたという言及が認められた。本授業を通して、病気の子どものケアや関わり方の方法、身近な人へのサポートについても考えることができていた。本授業を受けることで、病気の友だちの存在や心情についてより深く考える機会になったことがうかがわれた。

今後、本研究で得られたデータをもとに、病気の他者との接触経験が回答に及ぼす影響を検討することや、今回実施した授業内容の再検討を行うことが必要である。

Table1 病気の友だちと関わる際の注意点の結果

カテゴリー	代表的な内容
ポジティブな接し方	病気が治つたらなど、前向きな話をする。 治療をがんばろうと少しでも思える言葉をかける。
話を聞く	友だちの話を傾聴する。 話をたくさん聞いてあげる。
傷付けられない接し方	言われたら傷付く言葉を言わない。 病気や外見、気になっていることをからかわない。
不安を軽減する関わり	病気に対して不安になるようなことは言わない。
心理面に関する理解	無理に、何の病気か聞かない。 友だちの気にしているところには触れないように、病気とは違う話をする。
身体面に関する理解	病気が悪化する状況を知り、そのうえで一緒に遊ぶ。 健康な自分や周りだけで決めず、病気のある友だちのことも考えて行動する。
相手の気持ちに寄り添った関わり	相手の気持ちを考えた行動や発言をする。 友だちの不安なことに気付き、それを踏まえて関わる。

Table2 授業感想の結果

カテゴリー	代表的な内容
病弱教育の存在・意義を知る	病気の子どもたちが通う学校があることを知った。 勉強を遅れずすみ不安がなくなっていくと思った。
病気による学びの困難さについて	病気の子どもたちは、学校に行きたいのに行けなくて、苦しいのではないかと思った。 勉強も外に出ることも制限されているため辛いだろうなと感じた。
病気になった時の気持ちを考える	一生付き合っていくけないといけない病気のある自分と重なって考えた。 自分が病気になった時の立場と周りから支える立場について考えることができた。
病気の子どもについて考える	入院している子どもがどのような気持ちでいるのかを考えることができた。 病気を抱える子どもにとって、学校・友だちの悩みは大きいものだと思った。
病気の友だちへの接し方	退院して、帰ってきたら、あたたかい言葉をおくりたい。 少しでも早く最初のように学校生活に慣れてほしい。
病気の人の関わり方	自分だったらどう思うか、相手の気持ちを考えながら接したい。 不安を軽減することができるように、そっとサポートをしたい。
看護の視野の広がり	病気の子どものケアにはいろいろな手段や関わり方があると思った。 不安でたくさん悩んでいる病気の子どものサポートについても学んでいきたい。

(KODAMA Shoko)